悲劇の黙示録

―大阪の地霊について考える―

随　筆

岡　田　光　正*

千日前は道頓堀と難波に隣接する大阪の代表的な繁華街のひとつだが，江戸時代は町はずれで，刑場や墓地の並ぶ土地であった．ここには焼き場(火葬場)や刑場(仕置き場)，首切り人の住居などがあり，行倒れや捨て子の絶えない場所であった．なかでも刑場は人目にさらされ，取り捨てられた死骸に野犬が群がって，その光景は凄愴をきわめたという．

今も残る竹林寺や法善寺は，死者を供養するための寺であった．法善寺では千日念仏の回向が行なわれたので千日寺とよばれ，千日寺の前だから千日前といわれるようになった．

刑場は明治４年に廃止され，つづいて明治８年には，墓地も阿倍野に移転して跡地は民間に払い下げられることになったが，難題が残った．難題というのは２百数十年の間に積もった焼き場の灰の山をどうするかということである．幕末のころには年間，７千数百人が葬られていたというから，灰の量もハンパではない．

その上，墓地は少し掘ると骨がゴロゴロ出てくるので引き取り手がなかった．そこで灰の山には坪当たり金２朱という金を付けて希望者を募ったという．１朱銀は約16枚で１両に当たるとされていたようだから，坪当たり２朱というのは，かなりの単価といえるだろう．結局，塩田スガという質屋の女主人が払下げを受けたが，実際に灰山などを処分したのは横井勘市であった．

墓地と刑場の跡地は見世物興行の場所になり，横井座という大劇場も開業した．横井座は3階建て，

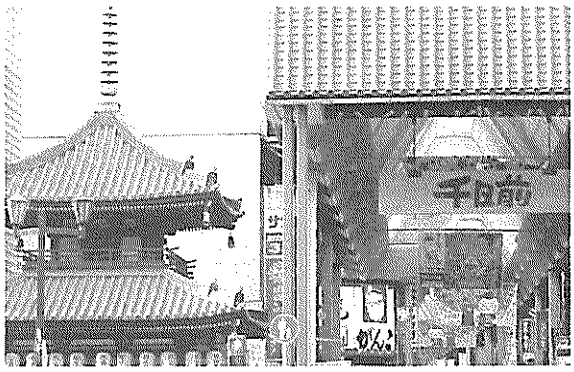

写真１　現在の千日前　写真の左側は竹林寺

建坪は530坪(1750m^2)というだけで詳しい資料はないが，ここでいう建坪が今の建築面積にあたるとすれば床面積は3000m^{2}以上になる．当時とすれば画期的な劇場だった．事業主は，墓地や灰山の処分を引き受けた横井勘市である．

だが，勘市は「横井座」竣工の日に，何らかのトラブルによって刺殺された．墓地や灰山の処理の仕方が適切でなかったかもしれない．

横井座は明治45年のミナミの大火で焼失，ほかの映画館や寄席なども焼けてしまった．以後，千日前は本格的な歓楽街として発展，南海電鉄ほかの出資により千日土地株式会社が設立され，楽天地という総合娯楽施設ができた．横井座の跡には大正３年，高さ36mでドーム状の展望塔などもできて人気を集めたという．

大阪歌舞伎座は昭和７年(1932年)，楽天地を建替えてつくったもので，２千人以上の客席数を持つ鉄骨鉄筋コンクリート造の本格的な大劇場であり，上方歌舞伎の本拠になった．だが第二次大戦後，大阪の歌舞伎人口は減る一方で，２千人の客席を一杯にすることは難しくなってきた．

そこで御堂筋の西側に，やや小振りの新歌舞伎座を建てたが，この新しい劇場は，村野藤吾氏の設計

*Kosei OKADA
1929年３月生
昭和27年(1952年)京都大学工学部建築学科卒業
現在，大阪大学名誉教授，工学博士，建築計画学，建築人間工学
TEL　06－6385－6493
FAX　06－6385－5696

写真2　水掛け不動

写真3　法善寺横丁の入口

による華麗なファサードにもかかわらず，敷地の奥行きが狭いため，歌舞伎の演出に必要な回り舞台がとれないなどの欠陥があった．そのためか歌舞伎は道頓堀の中座に移り，最近では外壁保存の方式で改築された新しい松竹座で上演されるようになっている．

一方，千日前に残った旧大阪歌舞伎座をどうするかについては，結局，観客席の大空間に新しい床をつくって7階建てのデパートに改造された．用途変更つまりコンバージョンである．内容は，1階，2階と5階が千日デパートで，3階と4階は衣料スーパー，6階はゲームセンター，最上階の7階はキャバレーであった．したがって，デパートといっても普通のデパートではなく，典型的な複合用途建築物つまり雑居ビルである．

ところが，この千日デパートは約30年前の昭和47年(1972年)5月13日の午後10時半ごろ出火して，118名が死亡するという大事故を惹き起こした．死亡者の数は，単体の建物火災としてはわが国では最大であり，その点では火災史に残る事故である．その後，これを上まわる死者を出した火災はないので，今なお日本一ということになるが，けっして名誉な記録ではない．

出火したのは3階のスーパーである．この店は閉店後，改装工事中で，工事の監督者は夕食のため外出．食事のさい，ビールを大ジョッキで2杯ほど飲んで現場に戻り，くわえタバコで店内を歩き回っていたが，そのうち衣料品売り場で突然，商品に着火，炎上した．たぶん燃えさしのマッチか吸殻を捨てたのであろう．作業員も出火に気付いて消火器などを探したが，有効な消火活動はできないまま，全員が避難した．こうして放置された火災は山積みの商品を燃料として拡大，開放されたままのエスカレーターの開口部から4階に延焼し，大量の煙と有毒ガスが空調のダクトやエレベーターシャフトなどから7階のキャバレーに流入した．

このキャバレーには客，ホステス，従業員など合わせて181人がいたが，下の階での火災発生については何の連絡もなく，煙が流入してきて初めて気がつき大混乱になった．

キャバレーのある7階には階段が4ヶ所あったが，鍵が掛かっていたり，カーテンで隠されていたりしたため，階段を利用して避難した人は僅か2名しかいなかった．その結果，65%の118人が死亡するという大惨事になったのである．

火災事故のあと裁判が終るのを待って，千日デパートの建物は解体され，大手量販店がデパート形式の店を建てた．だが，店は販売成績不良で撤退，会社全体としても業績不振で破綻寸前になったが，大きすぎてつぶせないということか，銀行の債権放棄などを受けて目下，経営再建中である．

刑場と墓地がなくなった後も，法善寺と竹林寺は残った．どちらも空襲で焼けたあと，竹林寺の本堂はビルの中に入り，法善寺は「水掛け不動」と「法善寺横丁」で有名になった．「水掛け不動」は水商売関係の人びとに崇敬されているという．

「法善寺横丁」は法善寺の北側の路地の俗称で，小料理屋，喫茶店，お好み焼き屋などが並んでいるが，最近，隣接する中座から出火して延焼，片側の大部分が焼失し，ようやく再建が進んだ時期に再び出火した．

写真4　竹林寺

「横井座の悲劇」から，ここを本拠とした「上方歌舞伎の衰退」「千日デパートにおける118名の死亡」「大手量販店の撤退」「法善寺横町の火災」と余りにもよくないことが続いている．これは偶然とか，タマタマというには多すぎるように思える．ここには何か眼に見えない力がひそんでいるのではないか．この千日前では無数の人びとが人を恨み，世を呪いながら死んだのである．

長屋王は藤原氏のために罪なくして自殺に追いこまれ，その一族も殺されたため怨霊になって聖武天皇を悩ませたといわれているが，奈良市郊外のその屋敷跡に建った大手の百貨店は経営破綻した．このような土地には悪の地霊つまり悪霊がひそんでいると考えるべきではないか．

地霊(Earth Spirit)とは，大地に宿って人間生活全般を支配すると信じられた霊的存在である．また死者の魂を地霊とみなすこともある．地霊の働きには二面性があって，人びとに恵みを授けるような性質と，それとは逆に災厄をもたらす過酷な性質が同居するという．

建築工事を始めるに当っては多くの場合，地鎮祭を執り行なう．これは工事の無事だけでなく，完成後も災害に会うことがないように祈るのである．そのほか，いわゆる「風水」の説などによって地相を占うという習俗もある．

いずれも荒ぶる地霊を抑え，その加護を求める人びとの願いから生れたものであろう．それを迷信だという人があるかもしれないが，われわれの深層心理に今も残る原始的感覚ではないだろうか．

ところで地霊は人に災厄を与えるだけではない．良い地霊もあって，そこは聖地といわれる．大阪の上町台地は，かつては聖地であった．ここで，あえて「かつて」というのは今は，そうとはいえないからだ．

現在，大和川は西に流れて大阪湾にそそいでいるが，これは度重なる水害を防ぐため宝永元年(1704年)に付け替えられたからで，古代の大和川は今の八尾から東大阪のあたりを北に向かって流れ，網の目のように枝分かれしながら，いまの大阪城の北，京橋から天満橋の付近で淀川に合流していた．そのころ大阪で地盤がよく高燥で，まとまった陸地をなしていたのは上町台地だけで，台地の東西両側は低湿地であった．

森の宮遺跡や法円坂遺跡にはじまり，茶臼山古墳，応神天皇の大隈(おおすみ)宮，仁徳天皇の難波高津宮，難波長柄豊崎宮と続く古代の遺跡や行政機関が全て上町台地に立地したのはこのためだ．さらに生国魂神社，四天王寺，高津宮，玉造稲荷神社など古くからの寺社も集中している．

なかでも生国魂神社の成立は極めて古く，国の守り神として石山崎に祀られていたという．石山崎というのは上町台地の北端で現在の大阪城の付近である．ここは北流する大和川が淀川に合流して大阪湾に注ぐのを見下ろす位置にあたり，国土の守り神にふさわしい場所であった．

生国魂神社の祭神は生島神と足島神だとされる．古代の大阪湾では河川から流入する土砂によって島が次つぎに形成されていた．昔の人びとは，そこに土地の生成にかかわる神の力を感じ，生島，足島と名づけて国土の発展と安全を祈ったのである．両神は同一の神で，その力を「イク」「タル」と対にして表現したものだという．

大八州(オオヤシマ)つまり国の霊を祀る名神大社で，延喜式では「難波坐生国咲国魂神社」という長い名前になっている．天皇が即位した大嘗祭の翌年，ここで土地の生成を祈る「八十島祭」が行われたが，これは国の重要な祭儀で，奈良時代には天皇自らが難波津におもむき，平安時代には宮中から祭使や神祇官が出向いて盛大に行われていたらしい．

神社の位置は上町台地の北端で現在，大阪城のあるところだが，かつては鬱蒼たる原始林で神霊の宿るところであった．沖縄のウタキ(御嶽)のような，あるいは大和の大三輪神社のような御神体山で，何人も侵すことのできない聖地だったという．

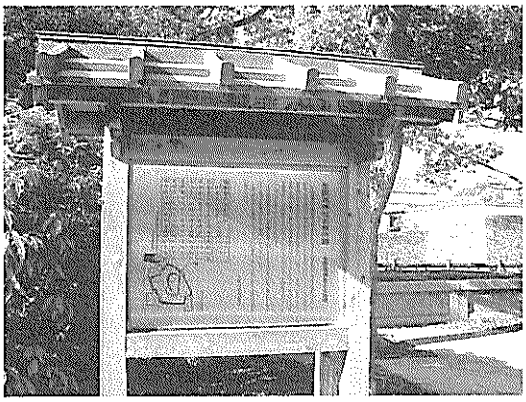

写真5　生国魂神社お旅所の跡
大阪城の駐車場にあり，毎年7月の夏祭りには，陸渡御が行なわれる．

孝徳天皇は大化元年(645年)長柄豊崎宮に都を定めて，白雉2年(651年)に完成，遷都したが，造営に当たって生国魂神社の神木を用いたと日本書紀にある．したがって，大化の頃には宮殿の用材に成るほどの巨木の茂った森があったことがわかる．

その後，時代を経て明応5年(1496年)本願寺8代の蓮如は上町台地の北のはずれ「生玉庄」に一宇の坊舎を建てた．これが大阪御坊，石山本願寺の前身である．蓮如の子，実悟によれば，最初に坊舎を建立した頃，石山の地は「虎狼のスミカなり．家の一つもなく，畠ばかりなりし所」だったという．前期，後期と2度にわたる難波宮の造営に森の木が使われたこともあるようだし，その後，数百年の間に相当な部分が畠になっていたのであろう．

本願寺は当初，生玉社(生国魂神社)から土地の一部を借り受けてスタートした．「摂津誌」によると，「蓮如，仏刹を建てんと欲し毀す．しばしば神異を示す．恐怖して止む」とあるから，本願寺も神社には手を付けることができなかったであろう．

石山合戦絵図によると生玉社と法安寺は寺内町に隣接して添え物のように描かれている．いうなれば生玉社は，庇を貸して母屋を取られたのではないか．なお，法安寺は生玉社の神宮寺として古くからあったもので，現在の法円坂という名称は法安がなまったものだという．

その後，本願寺は大坂の地を本拠として寺内町を整備し，堀や塀，土居を巡らせて防備を固めたので摂津一の堅城といわれるほどになった．塀を廻らせたのは防禦とあわせて住民の脱出を防ぐためでもあったらしい．

石山本願寺の総面積は，「信長公記」によると，「寺域方八町」(約76万m^2)で，現在の大阪城の特別史跡指定面積73万m^{2}と，ほぼ同程度である．石山の名前の由来については，工事のさい，大きな石がゴロゴロ出てきたからだという．

石山の地は，北は淀川，東は大和川に囲まれた小高い要害の地であり，かつ水上交通の要衝でもあった．これに信長が目をつけて立ち退きを迫ったが，本願寺はこれを拒絶，反信長の大名と連合して頑強に抵抗した．いわゆる石山合戦である．

さすがの信長も攻めあぐね，10年以上かかっても武力では決着がつかず，ときのミカドの調停により，ようやく立ち退かせることができた．退去に当たって本願寺は城内に火をかけたため寺内町と共に全焼，このとき生玉社も法安寺も焼失したと思われる．

信長の死後，秀吉は石山本願寺の跡地に大阪城を築いたが，邪魔になる生玉社(生国魂神社)を上町台地の南の方，四天王寺に近い現在の位置に遷した．そのさい社殿と社領を寄進したというが，結果として追出したことになる．だが，無理して造った大阪城も，あえなく落城，豊臣政権は一代で滅んでしまった．

秀吉は，秀頼が生まれると関白秀次を高野山に追って切腹させ，その妻妾，子女30余人を京都の三条河原で処刑．その無道さには諸大名からも非難の声が上がったという．また紀州の根来寺を焼き，雑賀衆を殲滅するなど，信長ほどではないが残忍な殺戮を繰り返した．

こうしたことも関係がないとはいえないが，何よりも生国魂神社という，たぶん有史以前からの国土の守り神を追い出したために，神霊の怒りをかったのでないか．

聖地には強力な地霊がひそんでいる．聖地は侵してはならないし，動かすこともできない．この教訓が人類一般に共通することは，エルサレムを見ればわかる．

エルサレムにはユダヤ教の「嘆きの壁」，キリスト教の「聖墳墓教会」，イスラム教の「岩のドーム」などの聖地が重複している．ここでの紛争が終るのは，人類が滅亡するときではなかろうか．